



〔評者〕
柏木 秀行

飯塚病院連携医療・
緩和ケア科部長

緩和ケアレジデント マニュアル 第2版

森田 達也，木澤 義之 監修
西 智弘，松本 禎久，
森 雅紀，山口 崇 編

●B6変型 頁536 2022年5月
定価：3,960円（本体3,600円＋税10%）
[ISBN978-4-260-04907-8] 医学書院刊



レジデントマニュアルシリーズと聞けば、「片手で持てて、ポケットに入るけど、ちょっと厚めのマニュアルね」と多くの人がイメージする。そのくらい、各領域に抜群の信頼性を備えた診療マニュアルとして位置付けられ、定番中の定番だろう。そんなレジデントマニュアルに、緩和ケアが仲間入りしたのが2016年であった。初版も緩和ケアにかかわる幅広い論点を網羅していたが、さらに充実したというのが第2版を手にとった感想である。

緩和ケアもここ数年で大きく変化した。心不全をはじめとした非がん疾患をも対象とし、今後の症状緩和のアプローチが変わっていくような薬剤も出てきた。こういったアップデートをふんだんに盛り込んだのが第2版である。緩和ケアに関するマニュアルも増えてきたが、網羅性という点において間違いなく最強であろう。そう考えると分厚さも、「これだけのことを網羅しておいて、よくこの厚さに抑えたものだ」と感じられる。

もう少し具体的に本書の魅力について触れてみる。まず、エビデンスレベルの表記が相変わらず秀逸だ。自分の参考になっている情報やプラクティスが、何を根拠にしているかを理解することは重要である。これらの情報はただ単にマニュアルとしての価値ではなく、学習者を支援する一冊であることを物語っている。症状緩和に関しては、

ここ数年で登場したヒドロモルフォンやアナモレリン、ミロガバリンといった薬剤についてカバーされている。こういった新たな薬物療法がどのように位置付けられているかに注目しつつ、安全に活用するためのガイダンスとしても活用できる。さらに、心不全や神経難病といった多様な非がん疾患に対する緩和ケアはもちろんのこと、「小児の緩和ケア」や「がんの親をもつ子どものサポート」といったさまざまな状況での緩和ケアについて扱われている。こういった点は、より緩和ケアのマニュアルらしい点として強化されている。

以上を踏まえ、この『緩和ケアレジデントマニュアル 第2版』の使用シーンをイメージしてみる。まず文字通りのレジデント世代には、その都度確認するためのマニュアルとして活用してみよう。繰り返し手にすることで、あやふやな知識が確かなものになっていくはずだ。上級医はぜひ指導に活用してほしい。「あの本に書いてあるから見ておいてね」というには、網羅性の高いこの本がうってつけだろう。各パートはそれぞれの領域のエキスパートが手掛けている。いずれも指導医として信頼できる執筆者たちのメッセージが、あなたの目の前の学習者に直接指導してくれるのである。

レジデント世代はもちろん、緩和ケアにかかわる幅広い医療者に活用していただきたい一冊である。